

## 17. 脳卒中センター退院時に重症であった症例の予後調査

徳島大学病院 リハビリテーション部

○樫原道治, 中尾成孝, 川崎純, 高田信二郎, 安井夏生

### 【はじめに】

2006年以降の医療制度の改革により、急性期病院では2週間以内の早期退院が推奨されるようになった。リハビリテーションを含む亜急性期の医療の主体は、回復期リハビリテーションなどに移行している。そこで、個々の患者さんと集団としての地域の脳卒中の全体像を知るには急性期、亜急性期、慢性期の各施設の連携が重要となっている。

### 【対象】

徳島大学病院脳卒中センターを平均2週間程度の時点で退院した重症症例（Barthel Index  $\leq 40$ ）の予後調査を各施設の協力を得て行い、その結果を検討した。対象症例は2007～2008年にかけて退院した連続542症例のうち、6ヵ月後の予後調査が終了した211症例のうち、Barthel Index (BI) が40以下の51症例である。

### 【結果】

図1に対象症例の疾患別内訳を示した。

図2に全症例のBarthel Indexと予後との関連を示した。

図3に、重症の症例を慢性期における改善群と非改善群にわけて、改善経過を検討した。

図4に、改善群と非改善群を退院時のFIMスコア（認知機能と運動機能）から示した。

図5に性別からみた改善傾向の違いを示した。

改善例の平均年齢は、66.3歳、非改善例では76.1歳であった。

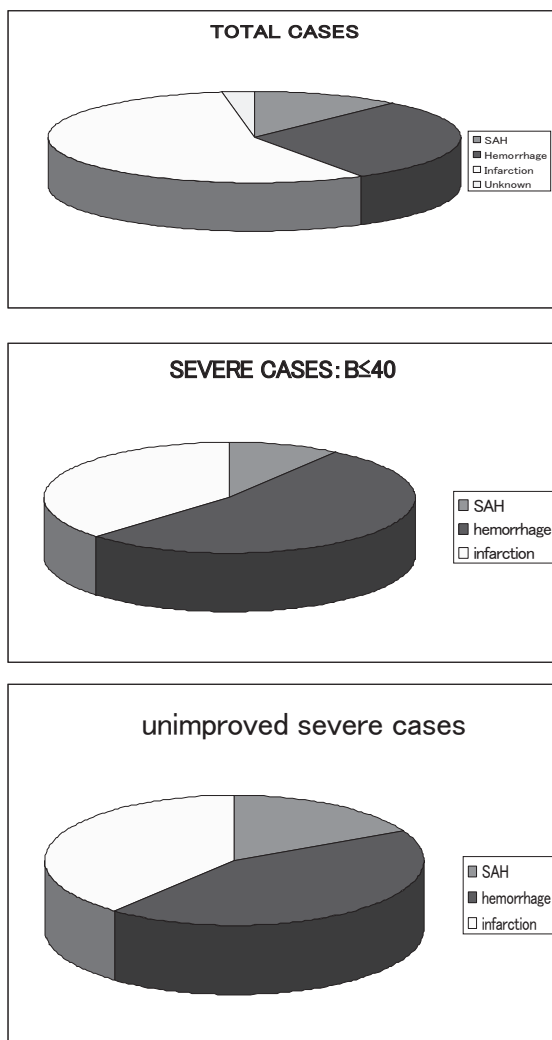


図1 症例群の疾患別内訳

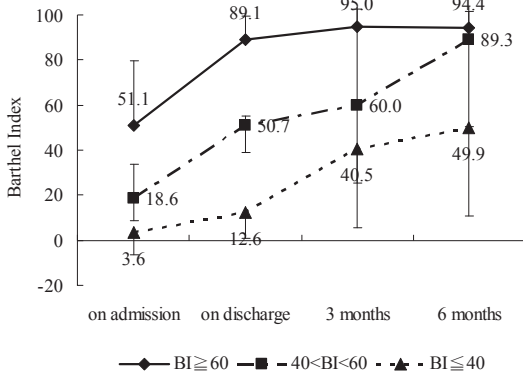


図2 バーセルインデックスからみた改善傾向 (中尾ら, 2009)

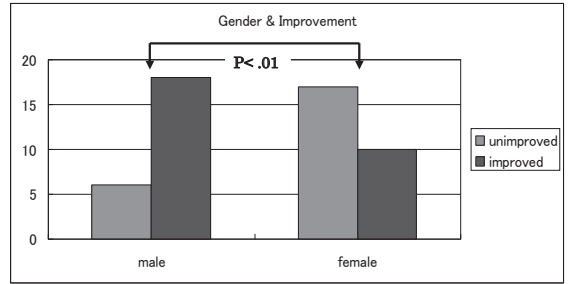


図5 重症例の性差による改善度の違い

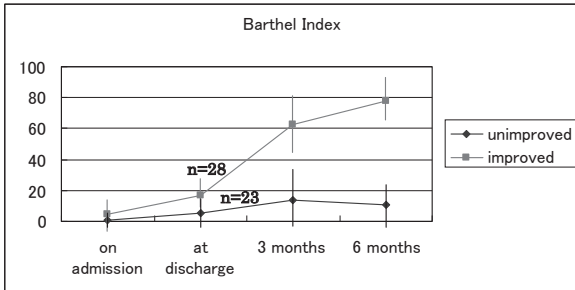


図3 重症例 (改善例と非改善例) の経過

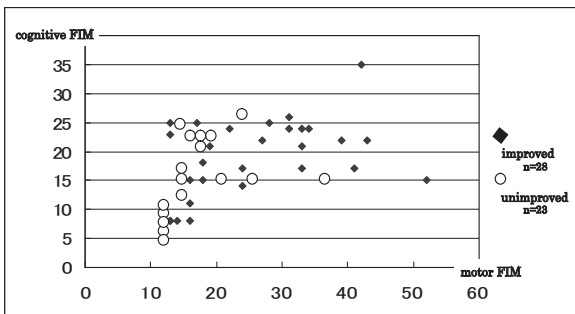


図4 退院時 FIM(運動機能/認知機能)からみた改善群, 非改善群の分散

【考察】

1. 重症例では、脳内出血が多かった。
2. 改善例では、平均年齢が約 10 歳若く、男性が多かった。一方、女性では非改善例が多かった。
3. FIM による検討では、認知機能における改善よりも運動機能による改善が顕著であった。
4. 急性期病院の退院時に ADL が重症であっても、6 ヶ月間はリハビリテーションを継続することの重要性が示唆された。